
まだ見ぬ嫁の為に

マスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まだ見ぬ嫁の為に

【Nコード】

N8889Y

【作者名】

マスター

【あらすじ】

ハンターハンターの世界に二度目の人生を得た主人公が、将来誕生するであろう嫁獲得を目指し遙たかみを目指す。

目的達成の為ならば、原作主人公一行すら利用する覚悟。なんせ、嫁獲得に一番の障害になるのはゴンとキルアにほかならない。

そんな、欲望に素直な少年が健気に生きる日常を描いた物語。

主人公の名前が、作者の前作と同じですが、全く、関係ありません。

第1話（前書き）

漫画連載に伴い作者の中で再び熱が付いたので、ハンターハンターのSSを書いてみることにしました。

誤字脱字等は、なるべく気を付けておりますが今までの実績上取り切れてない可能性が大です。

先に謝らせてください。

読み汚し申し訳ありません。

では、再びよろしくお願い致します。

主人公の名前は、作者の前作と同じですが、一切関係ありません。転生特典などはありません。

第1話

今年で4歳になるが、こんな世界に生まれなくなかったと思っていた。

誰が、好き好んで人の命が紙屑みたいな価値の世界に転生しなきゃいけないのだ。

出来る事ならば、人が死なない世界に転生したかった。出来る事ならば、学園物などが理想だ…あえて例を言うならば『TO LOVE E〇』とか『アマガ〇』などがよかった。原作は、読んだ事が無いのでよく知らないが、かなりリア充的な展開が期待できただろう。

『本日、ハンター協会のネテロ会長が…』

TV放送で一番聴きたくない単語が流れた。

そう…この世界は、HUNTER×HUNTER!!

日常を送るには、とても辛い世界。

非日常を過ごすには念能力と呼ばれる超能力紛いな物が必要な世界。だが、それでは、お腹を痛めてまで私を生んでくれた両親に申し訳ないと思ひ。最近では、考えを改める事にした。

そこで、アリ編までしか原作を知らない私が必死に考えた人生プランがこうだ。

- ? 念能力の取得
- ? グリッドアイランドの『支配者の祝福』を入手!!
- ? ネフェルピトーを嫁として確保!! 実際、一番重要な目標
- ? ハンター試験合格

正直、自分でも無理な課題を挙げたなと思う。だって、原作キャラや旅団との遭遇率が高過ぎる。

この世界で生き残る為にも最低限?は必須。?を手に入れて世界から隔離された環境で又ク又クと過ごす!! そして、何より重要なのが?だ。だが、これを達成する条件は、果てしなく厳しい。だって、ゴンさんやキルアを相手にしないといけない可能性があるからだ。正直、あの状態になったゴンさんには逆立ちをしても勝てないだろう。だが、われに秘策あり!! その方法は、まだ秘密だ。?と?を達成する為にも、やはり?の目標は不可欠。そして、?を獲得する手段として?だ。

「そろそろ、道場の時間でしょう?遅れずに行くのよ〜レイア」

「はい、もうすぐ行きます。お母様」

この世界では、前世の世界と違い人間の限界を超えている連中が多い。その事から鍛えれば誰でもある程度のところまでたどり着けるのは明白だ。両親がサラリーマンと専業主婦の私がどこまで強くなるかは疑問ではあるが…とりあえず、頑張ります!!

ちなみに、私の場合は俗に言うアルビノ呼ばれる遺伝子疾患を患っており、少しでも体が丈夫になりたいという名目で道場に通わせてもらっている。後、容姿については…ぶっちゃけ、某人型汎用兵器のアニメに出てきたカヲル君だ。

そして、私は今日も元気に心源流拳法道場へ通う。

心源流拳法道場にて。

「イチ！ 二！ サン！ ヨン！………」

道場では、同年代に近い子供も多数いる。やはり、ハンター協会会長と同じ流派という事で人気なのだろうか、それとも自分の身程度を守るだけの力を付けておいてあげたいとおもう親心からなのだろうか。この世界の犯罪率は、前世の日本とは比べ物にならないからぬ。

それにしても…子供相手に多少は優しく指導してくれているというのにやはりキツイ。

腕立て、腹筋、スクワット、マラソン、柔軟体操が準備体操で終わり次第。正拳突き や 子供同士の組手。先輩からの型の指導など一日でたくさんのおこなう。今年から通い始めたが、みんなの練習についていくのがやっとだ。

全く、原作キャラたちの性能に啞然とするな。ひと桁の年齢で天空闘技場を200階まで上り詰めるってどういう事よ。

「はあ……」

「レイア！！ たるんどるぞ！！ マラソン2km追加だ」

「サーイエッサー！！」

ため息をつく私に、道場の高弟から活が入った。

くっそ！！ 誰でもいいから私に早く念能力を教えてくださいー！。

レイア私室にて。

「今日も疲れた〜」

いくら体力が必要だからって、四歳児には無理なレベルのメニューな気がする。だが、ここ最近着実に体力が底上げされているのも事実である。これが、話に聞く超回復と言う奴なのだろう。それとも、○櫛ワールド新法則なのだろうか。

このままの状況が続ければ、体力だけは確実に付くだろ。しかし、念能力については微妙だ。高弟になり師範代クラスの目に止まれば、開花させてもらえるかもしれないが…期待はできないだろう。やはり、念能力取得のためにハンターを目指すしかないかな。

？の目標達成の為に、どんなに遅くても原作キャラたちを同じ時期に念能力を学ばなければ、達成は不可能だろう。

私が合格可能なハンター試験は……やはり、原作キャラたちと同じ試験しかないだろうな。内容は、ある程度把握出来ている為、対策がしやすい。

ただし、ヒソカとイルミともご対面してしまうというマイナス要素もある。しかし、ネフェルピトーを嫁に迎えるという欲望と天秤に

かければあら不思議：天秤がネフェルピトー確保の方に傾く。

機会をみて、両親にハンター試験受験に付いて話そう。未成年の場合は、色々と許可が必要だった気がする。その後、道場のハンター試験経験者に指導を頼もう。それが例え茨の道であろうとも男にはやらねばならない時もある。

まずは、例の試験がいつなのかを調べてから今後の計画を立てよう。せめて、私がゴンやキルアと同年代でないことを切に願う。才能の差を少しでも埋める時間が欲しい。

数日後。

原作キャラが参加するハンター試験（287期）がいつなのか判明した。その結果を見て私は、安堵した。なぜなら、今から12年後だからである。これだけの猶予期間があれば、道場で血の滲む様な努力をすれば最低限合格可能ラインにはなれるだろう。

学業から両立は、大変だろうが頑張るしかない。仮にハンターになれたとしても、世の中で生きていく以上、最低限の学力は必要だからね。

「さーて、いくら12年後とはいえどうやって両親に切り出そうかな…」

問題は山済みである。12年の間にどれだけの問題を解決できるだろうか…いや、全て解決せねばならないだろう。考えるだけで気が重いな。

こういう時は、趣味に没頭するのが一番だ。

私は机の引き出しから、彫刻刀と2Lペットボトル位の木片を机の引き出しから取り出した。前世では、手先が器用だった事もあり趣味でフィギュア原型師をやっていた。おまけに、存外人気が出て某イベントではそれなりに稼いでいた事もあった。

まあ、この世界でフィギュアのような至高な趣味を持つ人物など、そうそう居ないだろうから収入には期待できないがね。

そして、私は今日も疲れを癒す為に趣味に没頭する。

この趣味が意外な人物の目に止まるとは、思ってもみなかったレイアである。

第1話（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

更新ペースは、亀だと思えますが
長い目で見ていただけると幸いです。

第2話

ハンター試験受験を心に決めてから、早二年…6歳のレイアです。

俗に言う小学校一年生です。

ハンターハンターの世界にも学校ってあるのですね。てっきり、自己学習や通信教育しか存在しないと思っていました。だって、原作じゃそんな描写なかったしからね。

という事で、二回目の小学生を堪能しております。いやー、前世で社会人を経験している私にとって2時や3時に自宅に帰るのは又ルゲーもいいところだ。

だけど、道場に通う時間が学校の為、短くなってしまったのは少し痛いかなと思ったけど…そんな事は無駄な心配だった。先輩達が濃厚なトレーニングメニューをしつかりと考えてくれている為、時間が短くなるうと総運動量は変わらないという虐め。

今日も道場で鍛錬を終えて、疲れた体に鞭を打って帰宅した。

このままでは、ハンター試験前に私が死ぬんじゃないだろうかと思っくらいに疲れた。原作キャラの才能が妬ましい。キルアなんて6歳で天空闘技場を僅か二ヶ月で150階まで登ったんでしよう。きっと私が一ヶ月かかった事を一時間とかからずにもノにしてしまうだろう。

やめた やめた!!

こういう辛気臭い事を考えるのは、ダメだ。そもそも比べる対象が誤っているのだ。この世界の中心的存在と脇役の自分を比べるなどナンセンスだ。こういう時は、電腦ネットと趣味のフィギュア原型でも作ろう。

「お、またMilkyから返事がきたか。相変わらずマメな人だな」
この二年で私のフィギュアが電腦ネットのオタクの中でも稀に話題に挙げられるようになるまで、腕を上げた。おかげで、こういったファンの方からメッセージが貰えるようにもなった。それにしても、木彫りフィギュア何てマニアックな代物を毎回買ってくれるこの人に感謝しないといけないね。

私のフィギュアは、下着のシワまで丁寧に作っている為、一ヶ月で1・2体程度しか作れない。出来上がり次第、即売付きのネットオークションに流している。その殆どを落札してくれているのがMilkyというハンドルネームの人だ。全く、原価が0円に近い商品が一体辺り10万ジェニーで売れるのだからメシウマだよ。

「なるほどなるほど…色を塗ったフィギュアを売り出して欲しいか」
Milkyからのメールには、たわいない挨拶とフィギュアを塗装して売り出して欲しいとのことだ。本来フィギュアとは、塗装されてあるべきものと印刷すれば原稿用紙5枚にはなる程の文章を書いてきた。塗装をする事に対して誰かの師事を仰ぎたいのであれば手配までしてくれると至れり尽くせりだ。

何者かは知らないが、熱い漢であることは間違いないな。きっと、フィギュアに命をかけているようなそんな人物だろう。折角の機会だからダメ元でお願いしてみようかな。ちょうど、漆塗りに興味が

あつたから その辺の手配できたらお願いと書いておこう。

「木彫りフィギュアの漆塗りとか買う方もアレだが…それを趣味で作ろうとする私も相当のアホだな」

メール返信完了。

さてさて、あんまり遅いと両親が心配するから今日も寝るとしよう。

一週間後。

学校から帰ってきてみると、家の前に黒塗りの高級車が止まっています。まるで、ドラマを見ているかのようです。

あれ、これってかなりまずい状況じゃない!?

父が会社のお金に手を付けてその代償に私と母が売られるとか、誰かの連帯保証人で借りた人が逃げたから回収にきたとか展開か!?

だが、どちらにせよ普通の状況ではない。

ここは、素直に警察に助けを求めに逃げるのが得策だろう。私のような子供が大人の武力に叶うわけもないからね。

私が身を翻し、この場を去ろうとした瞬間 車に乗っている黒いスーツを着込んだドライバーと目があつた。

ゾクゾク

こいつは、ヤバイ！！

道場に通っている事から自分より強い人は見慣れているので、多少相手が強かろうと驚く事はない。しかし、あのドライバー明らかに只者ではない。道場の高弟よりかは、確実に強い。下手したら師範代にも届くかもしれない。そう感じた。

逃げる！！

それが私にできる唯一の手段だった。逃げ切れるかどうかなんて問題ではない…逃げる以外に道がないのだ。私は、力の限り人気の多い場所に向かって走った。6歳の足では、あの者から逃げる事など出来ないのは至極当たり前だが…ここは住宅地だ。そして、家から約50mも警察がいる派出所モドキがある。そこまでたどり着けば私の勝ちだ。

ダッダダダダ

地面を力強く蹴り、一心不乱に走る。

バタン

背後で車の扉を締めると聞こえた瞬間、目の前に黒い壁が現れた。人間急には止まれない…当然 私はそのまま黒い壁に衝突した。

ドーン

どうやら、壁ではなく人と衝突してしまったようだ。本来であればこちらが謝らねばならないのだが…私にはそんな余裕はなく。ぶつかった人の助けを求めた。

逆光でよく顔は見えないが…近所の大人だろう。

「お願いです 助けてください!!」

「どうしたのですか?」

なにやら、とても強そうなお声の人だ。

「家に何やら物騒な面構えの人が来て、まだ家には母が…」

「それは、大変ですね。それで、何処にその人達が?」

どこつて、私の真後ろから走ってきているでしょう。マフィアみたいな顔つきをしたスーツの男が…

「どこつて…あれ?」

振り返ってみれば誰も居ない。あるのは、黒い車だけだ。

・
・
・

「どうなさいました レイア様」

全身から冷汗が流れる。まさに、蛇に睨まれた蛙と言った感じだ。

「ど、どちら様でしょうか?」

「申し遅れました。私は、とある方からレイア様のお手伝いをする
為に遣わされましたワジマと申します。以後よろしくお願いします」
私は、この瞬間 M i i k y というハンドルネームの人が誰なのか
を理解した。まさか、M i i k y がゾルディック家のミルクだった
とは…普通気づくよねと後々思ったレイアであった。

第2話（後書き）

最後までよんでくれてありがとうございます。

ハンター試験開始までは、あと数話こういった展開が続きます@@@

第3話

ゾルディック家執事襲来事件より、二年が経過して今8歳のレイアです。

実は何を隠そう…あの黒スーツを着た執事こそが私の漆塗りの師匠なのである。一体、ゾルディック家の執事は何者だと言いたくなる正直、ここまで多芸に秀でていいるのならば、執事にフィギュアづくりを命じればいいと思う。

しかも、この人さ…私の実家のお隣に住んでいるのだよ。なんでも私が一人前の漆塗り職人になるまで帰らないそうだ。

両親には、親切なお隣さんから漆塗りを学んでいますと可愛く言っているが…マジ命懸け過ぎる。

「集中しなさい。線が歪んでいます」

「はい!!! 師匠」

という事で今日も元気に漆塗りを学習中です。

早朝に漆塗りを学び、昼間が学校、夕方に道場、夜にフィギュアづくり。既に過労死しそうな殺人的なスケジュールだ。かと言って、漆塗りもフィギュアも勝手にやめられない状況だ。死にたくないもん。

だが、考えようによってはタダで最強のボディーガードを付けてもらっているとも取れるのでありがたさ半分といったところだ。

「そろそろ、学校の時間ですね。行ってらっしゃいませ レイア様」
「今日もご指導ありがとうございます ワジマさん。行ってきます」

基本的にいい人なのだろうが…顔が怖い。いや…ゾルディック家の執事であるからいい人というのは間違いだな。命令一つで二年間指導した私でも躊躇いなく殺すだろう。

怖い 怖い。

学校にて。

「好きです。付き合ってください」

クラス一の美少女が私に告白してきた。正直言えば、私ロリコンでもあるから嬉しいよ。でもね、私は浮気しない事になっているんだ。

「ごめんなさい。私には既に心に決めた人？が居るので」

最近、学校で呼び出される事が多くなった。素直に無視するのでもいいのだが…こういう多感な年頃の女性を無下に扱った後が怖い。だから、誠意をもって謝る事になっている。それでも、翌日には陰口を叩かれることが多いけどね。

モテる容姿に生まれたのは非常に嬉しい。女性に好かれるのも歓迎だ。しかし…断られなければならないのだ。それが、将来の自分の糧にな

るのだから今は耐え忍ぶ。

「や、やっぱりホモだって噂は本当だったのねー」

女の子が何やら大声でとんでもない事を言いながら走り出した。そんな根も葉もない事をどの口がいうんだ！

「まてや…って、無駄にはえええええー」

口封じをしようと思ったときには既に女の子は居なかった。口封じと言っても、当然物理的な意味じゃない。ただ、私がホモじゃないとわかるまでじっくりと話し合いをするだけだ。

翌日、学校では私がホモと認識されていた。

くっそ！！ 登校拒否してもいいレベルだぞ これ。

数週間後の道場にて。

何やら、むさ苦しい高弟から身の毛がよだつような熱い視線を感じる。その高弟は、やたらと私の世話を焼いてくれる…特に組手の相手を積極的にしてくれる。まあ、私としては非常にありがたい。

ここ二年、私はワジマさんが実家でもやっていたと言う筋トレを導入した。筋トレというか…ぶっちゃけ、ゾルディック家の門番がやっていた重石を付けるトレーニングだ。あれが存外、いいトレーニングになるのですよ。まあ、重さはゴン達が付けていたお守りの1/3程度だけだね。子供のうちから無理をすると身長が伸びなくなるから控えめにしておいた。

そんなわけで同世代の子では、既に私の相手には役不足となつてしまっている。

だから、年次の上の先輩や高弟に混ざる事もしばしばといった感じだ。

「本日の鍛錬はここまで！！ 皆のものを気を付けて帰るのだぞ。ここ最近、暴漢の被害が多くなってきている。いいかお前ら…返り討ちにしろ！！」

「……………押忍！！……………」

まあ、私には関係ないけどね。

こういう時に男に生まれてよかったわとつくづく思う。……………心配がなくなるからね。母の事は少なからず心配ではあるが……………うちのお隣さんを考えれば、何も問題がない。

さーて、今日も死ぬほど疲れたからさっさと家に帰って、掘り掘りしよう…木彫りのな意味で。

「お先に失礼します！！」

「ああ、気を付けて帰るんだよ」

道場の皆に挨拶をして、帰路についた。

帰り道にて。

「朱に染まればなんとやら…か」

なんだかんだでこの世界を満喫している自分が怖いな。前世と比べて肉体面がかなり強くなっている事もあるのだろう。まあ、それでも道場の高弟には勝てないけどね。正直、道場の連中を見ているとみんなハンター試験合格できるんじゃないかと思う位だ。特に体力面が異常に優れている気がする。

特に組手の指導をしてくれる高弟なんて、体力・スピード・攻撃力とどれをとっても他の高弟と比べて抜きに出ているからね。恐らくハンター試験受験時のハンゾー位強いんじゃないかな。

ザワザワ

一瞬、肉食獣に狙われているような気がした。

「あれ…誰もいないか。おかしいな、今…気のせいかな」

背後を振り返ってみても誰もいない。周りを見回しても誰もいなかった。きつと、最近頑張りすぎて疲れているのだろう…帰ったら掘り掘りしよう。

翌日、高弟の一人が行方不明になったと聞いた。

ミルク様からの命令でレイア様の護衛について早二年が経った。

子供の成長とは恐ろしいものだ：私がゾルディックで長年かけて学んだ事をスポンジのように吸収していくのだから。後、4・5年もすれば一人前と言ってもいいだろう。ミルキ様が手厚く保護するのも頷ける。

特にフィギュアといった模型づくりの才能は実に目を見張るものがある。一つ一つの作品に対して愛情すら感じられる程だ。遠くない未来、名前が売れる事は間違いないだろう：主に変態という意味で時計を見るともうすぐ8時になる。

そろそろ、道場が終わり帰宅される時間だ。

最近、この辺で若い男ばかりを狙った暴漢が出ると噂されている。しかも、それなりに腕が立つらしく今だに逮捕に至っていない。レイア様は8歳ではあるが、その身体能力は既に大人にも引けを取らない為、普通の暴漢であれば返り討ちにする事位可能だろう。まさに、心源流拳法に四年も毎日通い続けている成果とも言えるだろう。

「念には念を入れるとしよう」

身だしなみを整えて家を出た。

レイアの帰宅路にて。

レイア様から20m程後方に獲物を狙うような目付きの男がいた。

なるほど…捕まらないはずだ。

あの男は確か、レイア様の身辺調査を行なった際にリストに載っていた。レイア様を通う心源流拳道場の高弟だったはず。ハンター試験合格間違いなしと言われる逸材であるが、素行が悪いとも言われている。

念能力までは取得していないようだが、身のこなしを見る限り今のレイア様では勝てないだろう。

暴漢がレイア様に背後から襲いかかった。それと同時に私は、暴漢の前に立ちふさがった。

「悪いが、貴様には死んでもらう」

ゴキリ

私は男の背後に回り込み首の骨をへし折った。そして、男の死体を背負ってその場から離れた。

その時間、僅か一秒たらず…誰にも気づかれる事はなかった。

第3話（後書き）

少しペースが早い気もしますが…ハンター試験まで
どンドン行っちゃいます。

やっぱり、レイアは尻に縁がある。

第4話（前書き）

読んでいただきありがとうございます。

第4話

暴漢事件から更に4年が経過して、12歳になったレイアです。

心源流拳法に通いつめて8年。フィギュア原型師歴も同じく8年。もう、立派な変態の仲間入りを果たしました。ワジマさんからは、今年いっぱい指導する事が無くなると言われて寂しいです。

ワジマさんの事はおいといて、私は父の仕事の関係で家族揃ってヨークシンに来ております。無論、オークションは今現在開催中です。まさか、幻影旅団と関係ないイベントでここにこられたのは僥倖だ。

本日は、いつもの木彫りのフィギュアとは違って変わって時代の最先端を誇る「ねんどろいど」を30体程作って持ってきた。日頃のフィギュアづくりの合間にセコセコと作った物だが、出来栄は自信がある。ジャパンで流行っているアニメや漫画のヒロインをモチーフにしたり、前世で見たことがあるモノを再現したりと様々な物を作ってきた。

と言っわけで、今日も商い頑張ります。

「じゃあ、お父様お母様。15時にホテル前で！！行つてきます」

仕事を終えた両親を二人つきりにしてあげるといふ気遣いのできる息子って素晴らしいよね。本当は、子供一人物騒な場所に行かせるのも良くないと言われたのだが…これでもお父様より強いんだけど
と言ったら、お父様が崩れ落ちた…ごめんねお父様。

ヨークシンの値札競売市にて。

ここは、誰でも好きに取引が出来る会場だ。もともと、値段は付けないで規定時刻まで最高値を付けた人に売るとというのがルールがあるけどね。

だけど、私の「ねんどろいど」の価値がどの程度か知る良い機会だなとも思う。一般人相手では、1個辺り300ジェニー位で売ればいいかな。いつもフィギュアをオークションにかけているサイトに出せば、良い値で買ってくれる固定客がいるので確実に儲かるが…それではつまらないからね。

という訳で、私はレジヤシートを広げて客を待つ。

一時間経過。

物珍しさに、何人かの目を引くが値段つかず。時間はまだまだあるから、本でも読みながら待つとしよう。

二時間経過。

言うまでもなく、誰も値段を付けてくれません。分かっていたさ、分かっていたさ。私の趣味が極めてごく一部の人間にしか通じないという事くらいね。でもさ…少しくらい夢を見てもいいじゃん。

あまりに暇だったので、近所の露店を見ようかなとも思ったが…荷物を置いたまま離れるなどこの世界では持つて行って下さいと言っているも同義。

私も念能力が使えたら、”凝”で一攫千金大作戦とか出来たのだから…と思いつつ、再び本を読む。

三時間経過。

「子供が一人で露店を開くなんて珍しいね。物騒な人が多いから危ないよ」

「そうなのですか。いやー、自分が作った作品が売れるか試したいなど好奇心でそこまで考えていませんでした」

私があまりに退屈そうで且つ客が来ないから、見に見かねて隣で露店を出しているオジサンが話しかけてきてくれた。もともと、オジサンの露店も客足はアレだけだね。

「変わった人形だが、なかなかいい腕じゃないか。折角だから、その人形一つとうちの値札のついてない商品を一つ交換しないかい？ 値札競売市に来て手ぶらじゃ帰りにくいだろう。まあ、うちの商品は実家の倉庫から引っ張り出してきたガラクタばかりだがね」

オジサンが苦笑する。

「喜んで！！ どれもこれも私が性を込めて作った作品達です。お好きな子を持って行ってください」

「ありがとう。では…この子を貰っよ」

どうやら、このオジサンはロリコンらしいな。迷わず、某白い悪魔

の人形の白スク水verを取っていったよ。欲しいなら値段つけて買ってくれよ。今ならどれも値段ついてないのに…。

では、私も選ばせてもらいましょう。

「どれにしようかな…」

オジサンの露店の商品は、数こそあるが…その半分以上は値段が付けられていない。そして、一本の変わった形状のナイフに目が行った。最近流行りのデザインではなく、どこか古びたナイフだ。

・
・
・

このナイフ…私の記憶が確かならば、ヨークシン編でゴンが見つかるハズのベンズナイフ!!

「オジサン、このナイフを買っていいかな？」

「値札がついてないから構わんが…子供がナイフを持つのは、関心しないな」

「ごもつともな意見だ。」

「大丈夫ですよ。私こう見えて、趣味で木彫りを8年近くやってるので刃物の扱いは慣れていきます」

「そうか、なら気をつけるんだぞ」

ベنزナイフGetだぜ！！

きつと、良い切れ味なのだろうな…これを使ってフィギュア作りた
いな。後、ハンター試験にも持参していこう。きつと、役に立つだ
ろう。

四時間後。

結局、あの後も買い手がつかず時間切れだ。まあ、売れはしなかつ
たが物々交換でとてもいい品物が手に入ったのは幸運だ。

「じゃあ、オジサンまたねー」

「おう、気をつけるんだぞ 坊主」

タダ同然でベنزナイフをゲットしてすごく気分がいいです。オジ
サンには悪いけど、これが商売なのよね。

「あ…ナイフもったまま飛行機って乗れるのかな」

空港の金属チェックで当然引っかかり、両親に怒られたの言うま
でもない。

「これも落札完了」

ワジマを送り付けてからというものの、数年でメキメキと腕を上げて

きたな。おまけに、アニメや漫画のキャラだけでなくオリジナルキャラのフィギュアまで出し始めている。しかも、完成度が高い…まるで、完成された作品から取ってきたような感じがする程だ。

今回の新商品「ねんどろいど」も実に素晴らしい。

二頭身でありながら、そのキャラの個性を全く殺していない。むしろ、引き立たせているようにも感じる。

今回のオークションでは、全29体が即売付きで出されいた為、無論全て俺が落札した。

29体：なんだ、この中途半端な数は。

『ワジマ、レイアが作っている「ねんどろいど」という商品を知っているな?』

『存じ上げております。全部で30体作成し、ヨークシンの値札競売市で売り出したそうです。なんでも、一体も売れなかつたそうですが…それを見かねて横の露店の方が持っていたナイフと交換したそうです。私もそのナイフを見せていただいたのですが…恐らくは、ベンズナイフかと』

ベンズナイフ…たしか、オヤジが趣味で集めている骨董品だったな。だが、そんなのどうでもいいんだよ。

俺にとって、大事なものはフィギュア!!

それにしても、値札競売市か…相手を見つけ出すのは不可能に近いな。まあ、仕方ない。

依頼すれば、再度作らせる事は可能であるが、それではファンとして邪道。俺の矜持に反する！！ 作り手の支援はするが 過度な干渉はしない。

俺のクオリティだ。

第4話（後書き）

誤字脱字報告、感想等頂けたらとても嬉しいです。

できれば、原作キャラの正確や口調等で突っこみたい事は、あると思いますが…見てみぬふりをしていただけると幸いです。

休日が終わった…そして、更新速度が激減致します@@

第5話

ヨークシンから更に2年が経過しました。そして、今日で満14歳になりました。言い換えれば、ハンター試験まで後2年ということころまで来ていた。

ちなみに、お世話になったワジマさんは昨年実家に帰っていった。ろくに挨拶もできずに別れてしまったのは非常に悲しい。役目が終わったら即座に帰るとか、執事としては有能かもしれないが…人としては幾分かアレですね。まあ、執事の教育方針がかなり特殊な家だから理解はしているけどね。

ワジマさんの事は、置いておいて…

今日は、私の誕生日という事で両親が手作りのケーキまで用意して祝っていたいております。

「お誕生日おめでとう レイア」

「おめでとう レイア」

「ありがとう お父様、お母様」

こうして、家族で食事を楽しめるのは最高だ。やはり、こういう暖かい家庭を持ちたいよね…ピトーと一緒に。そんなわけで、今日一日はいつもの非日常を忘れて ただの子供に戻ります。

数時間後。

両親と楽しい時間をすごし部屋でパソコンを見てみると、一通のメールが来ている。とつても、嫌な予感がする。普通なら、フィギュア関連のメールであろうが、本日は、私の誕生日だ…そんな日にくるメールなど不幸のメールに間違いない。

恐る恐るメールの送信元を見ると、案の定Milkyからだつた。

大事なファンを悪く言うわけではないが、誕生日には見たくないネームであった。誕生日に、暗殺一家からメールを貰うつてさ…なんだか、怖いじゃん。いつも、お前を見ているぞ的な意味でさ。

「えーと、なににな…」

セオリーの如く、挨拶から入り…誕生日に祝辞…作品に対する評価…次回作の予定の質問などが書かれている。そして最後に…こう書かれていた。

『オヤジ達にレイアの作品を熱く語ったら、家族の像を作ってもらおうという話になった。良い返事が期待している』

・
・
・

ドクンドクン

冷汗は流れ、心拍数はかつてない程に高くなっている。

か、考えるのだ レイア!!

相手の気分を害さず且つこの場を乗り切る方法を…すぐに返事をする必要はないだろうが、どんなに遅くても一週間以内に返事をしなければ本当に命に関わる。

ポク ポク ポク チーーン

ダメだー！！

一休さんスタイルで考えてはみたが何一つアイデアが出てこない。そもそも、ゾルディックの依頼を断るとか無理ゲーだろう。ハンター試験や学業があるから、お断りしますとか言った暁には、イルミに針でめった刺しにされそうだ。

諦めよう…人間諦めが肝心だと何処かで聞いた気がするしね。

私は、素直に快諾の返答を送った。

誕生日に死刑執行書にサインするような行為をする事になるなんて、私は世界一不幸な少年じゃないか。

恐らく、10人の大家族像となると…最低半年は帰れないのかな。家族にどう説明しよう。後、道場にも話をつけておかないとだめだよな。

二週間後。

絶対に行きたくないでござる…！ どのぞのニート侍みたいなセリフを夜な夜な吐きつつ…とうとう、お迎えの日がやってきました。

快諾のメール送信後は、二週間後に迎えの者を寄こすからそれまでに周辺整理をしておけとの事だった。私が二年後のハンター試験受験の為に頑張っているのを知っていたのだろう。：あちらから、道場に行けない為 代案として執事の方が指導をしてくれる事になりました。当然、像作成にあたり報酬までちゃんと用意してくれるとの事だ。

「相手先にご迷惑をおかけしないようにね」

「子供のうちは何事も経験だ、しっかりやってこい」

両親には、電腦ネットで知り合った家庭にホームステイと言って乗り切った。もちろん、裏を合わせる為に、色々とゾルディックの方にも協力いただいた。真実など告げられるはずもない…伝説の暗殺一家にお呼ばれたので一年位戻る事が出来ませんなんて、どの口が言えるというのだ。

私に出来る事は、親に心配を掛けずに笑顔で家を出ていく…ただそれだけさ。

「もちろんですお父様、お母様。では、行ってきますね。お父様もお母様も体には気を付けてください。毎週必ずメールしますね」

子供らしく、元気に腕を振りながら家を出た。そして、家の目の前に止められている黒塗りの高級車へと足を運んだ。

ボタン

運転席から懐かしい顔の人が出てきた。やはり、あなたがお迎えに来てくれましたか…さりげない心遣いなのだろう。

「お久しぶりです レイア様。私めが、ご案内を務めさせていただきます」

「お久しぶりです ワジマさん。今日からよろしくお願いしますね」

神様…今だけは、貴方を信じたいです。どうか、生きて帰れますように。

一週間後、ドキア共和国のククルーマウンテンにて。

実家からココまでは存外遠く 道中ホテルに泊まりながら一週間かけてここまで来ました。なんと、ホテルは全てロイヤルスイートを用意してくれて最高でした。

ブルジョア万歳！！

と、馬鹿な事を考えているうちにゾルディック家の門…通称「黄泉への扉」まで来てしまった。

「す、すごく大きいです」

ゴクリ

「どうなさいましたレイア様？」

「ちょっと、持病の癩が…とところで、あの壁のような扉 開くので

すか？」

少し無理がある返しだったが…まあいいだろう。

「ええ、開きますよ。ここからは、徒歩になりますので私は門番と話を付けてきます。しばしお待ちを」

そういつて、ワジマさんは車を降りて門番の所へ行つた。

確か、原作でも車が走れるような場所じゃなかったからね。もしかしたら、車が走れる隠し通路とかもあるかもしれないが、そんなルートは部外者である私の為に使うはずないしね。

それにしても、ヨークシンといいゾルディック家といい思わぬところで原作主人公一行が行く場所に行つたな。

なんの因果やら…。

「試してみようかな」

原作のゴン達一行が着た当初は開ける事が出来なかったこの扉をね。心源流拳法を10年、そして重石トレーニングを8年と原作組みと比べてかなり長い年月を鍛えている。

荷物を持って車を降り、扉の前まで着た。

キルアのように3の扉までは無理にしても、1の扉…出来る事ならば2の扉まで開けられるといいな。全身の筋肉をほぐすために、軽くストレッチをして扉に手を当てた。

ワジマさんもちちに気がついたが、特に注意する事なく見守っている。

私がこの扉を開ける事ができないと思っっているのだろうか。それとも、扉を開けてゾルディック家に正式な手順で入れると思っっているのだろうか。

見せてあげましょう…10年間の成果を!!

「うおおおおおおお!!」

扉は、想像以上に重い!!

だが、この程度の門を開けられずしてどうする。将来相手取る事になるゴン、キルア…そして、何よりピトーを手に入れるのにこの程度の壁を開けられなくてどうする!!

力を振り絞れ!! 前へ進め!! この10年間が無駄でなかった事を証明しろ!!

「意地があんだよ!男の子にはっ!!」

ギイゴオオオーーン

1の扉が鈍い音を響かせて、徐々に開いていった。

まさに、感動の瞬間である。原作のゴン達では、来た当初開ける事が出来なかった門をこの私が開ける事に成功したのだ。10年間、幼少期の楽しい期間の全てを犠牲にしたかいた言っものだ。

しかし、原作キャラ達は一ヶ月掛からずこの門を開けてしまったという事を後々思い出し、枕を濡らす事になるのであった。

第5話（後書き）

レイアが生きて変えられますように...

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8889y/>

まだ見ぬ嫁の為に

2011年11月29日08時13分発行